

## 10/17 サムエル記第一 13 章 1-15 節「主の命令を守らない愚かさ」

小池 宏明 牧師

主なる神様は「異国人のように、自分たちを治める王様が欲しい」と願う民の声を聞き入れられた。主は預言者であり祭司であるサムエルによってイスラエル初代の王として、サウルを選び任命された。

### \*強大なペリシテ人との戦いを前に

サウル王は先のアンモン人との戦いで勝利したことで、自信をもって、ペリシテ人との全面戦争に突入してしまった。サウル王の息子ヨナタンがペリシテ人の守備隊長を殺したことで、ペリシテ軍がイスラエルに攻め上って来た。その兵力は戦車 3 万、騎兵 6 千、そして海辺の砂のように多い歩兵であった。一方サウル王率いるイスラエル軍は 3 千人。戦力的に不利な戦いである。サウル王に従った兵士たちは、隠れたり、逃げたりする状態だった。そこで、サウル王は祭司サムエルが行うはずの礼拝といけにえを、サムエルを待ちきれずに自分で実施してしまった。(13:8-10) この問題を指摘したサムエルに対してサウル王は言い訳をして、主の御前で悔い改めなかった (13:11, 12)。結局、サウル王は、王位から退けられることになった。(15:11) ここでは、単に、サウル王が、主の御心を取り次いでいるサムエルの言葉を守らなかったことに留まらず、真の王である主なる神様に背を向けて、御心を求めず、従わなかったことが大きな問題なのだ。(15:22, 23)

### \*私たちも弱さと愚かさを抱えた者として

今日に生きる私たちは、このようなサウル王の姿を見て、どのように思うだろうか。私たちもサウルのような弱さを抱えている。共に戦う仲間が減っていくなれば、不安に駆られる。立ち向かう課題が大きければ大きいほど、慌ててしまい、自分を見失うばかりでなく、主なる神様さえも見失って、祈り求めることも忘れて、勝手な行動をしてしまうことがある。罪を示されても言い訳をして、神様を畏れるよりも人を恐れてしまうことがある。また、最初は、主の任命に応じて華々しく信仰人生のスタートを切ったとしても、だんだんと慣れ合いになり、いつのまにか高ぶり、自分の我欲が出て、忠実な信仰者として生きることができない、そんな愚かさを抱えてはいないだろうか。

主の憐れみなくして、私たちは、一瞬たりとも生きることができない者だ。主の憐れみなくして、主イエス様によって与えられた信仰を、全うすることができない者なのだ。私たちは、主の憐れみをひたすら求めながら、主イエス・キリストの良き証し人として、地上の歩みを全うさせて頂くことができるように、祈り求めよう。